

## マタイによる福音書13章 「天の御国の奥義」

### 1A 譬えによる教え 1-52

#### 1B 種蒔き 1-23

##### 1C 四つの種類の土 1-9

##### 2C 悟らない心 10-17

##### 3C 御言葉への応答 18-23

#### 2B 毒麦 24-43

##### 1C 収穫まで待つ主人 24-30

##### 2C 肥大化する御国 31-35

##### 3C 譬えの解き明かし 36-43

#### 3B 買い集め 44-50

#### 4B 財産の管理 51-52

### 2A 故郷での拒絶 53-58

## 本文

マタイによる福音書13章を開いてください。私たちの今日の学びは、非常に内容の濃いものとなると思います。なぜなら、イエス様が「天の御国」を奥義として、その全体像をお語りになるからです。イエス様がこれまで、天の御国の福音、良き知らせを宣べ伝えていたことを思い出してください。山上の垂訓での教えがあり、それだけでなく、病を癒したり、悪霊を追い出されたりして、確かに天の御国が来ているということを経験させました。そして、取税人や罪人と食事をして、その救いの喜びを共に喜ばれていました。確かに、心貧しき者は御国の中に入っています。

ところが、神の国の鍵を持っている、その真理について聖書によって管理しているとされる宗教指導者たちが、イエス様の宣教に反対しました。そして前回の大きな出来事が起こります。悪霊をイエス様が追い出されたことを、「悪霊どものかしら、ベルゼブルによって追い出しているのだ」と言っていたことです。イエス様は、この働きゆえにご自身がキリストであることをはっきりと示しておられるのに、その聖霊の働きを冒瀆するのであれば、それは赦されない罪だと断罪されました。そして、主人がいないのにきれいにされた悪霊が、七つの悪霊どもを連れて来て、状況はもっと悪くなるという譬えを用いられて、メシアを拒んだイスラエルが、今、ローマによって支配を受けている以上に大変になる、つまりローマによってエルサレムの神殿が破壊されて、世界に散り散りになることを予告されたのです。

そこで、イエス様ががらっと、天の御国の宣教の仕方を変えられます。これまでは、はっきりとお語りになられていたのに、譬えを使って語り始められるのです。「分かる人ぞ分かる」という形で語り始められます。

## 1A 譬えによる教え 1-52

### 1B 種蒔き 1-23

#### 1C 四つの種類の土 1-9

1 その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。2 すると大勢の群衆がみもとに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆はみな岸辺に立っていた。

その日に家を出られたということですが、その手前でイエス様が語られていた時に、肉親の母親や兄弟たちがやって来ていました。けれどもイエス様が、御言葉を聞いて父の御心を行なう者たちが自分の兄弟、姉妹、母なのだとお答えになっています。このように、ある意味で突っぱねておられますが、主はますます、ご自分のそばで御言葉を聞いている弟子たちの焦点を合わせていかれます。それが、譬えで語り始められるところでよく分かります。ここでは、群衆に対して語り始められます。家を出て、ガリラヤ湖のほとりに座っておられましたが、ユダヤ教のラビ、教師は、多くの場合、座って教えられます。群衆が多く来たので、ご自身は舟に乗られて、そこから岸辺にいる群衆に語られました。

3 イエスは彼らに、多くのことをたとえで語られた。「見よ。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。4 蒔いていると、種がいくつか道端に落ちた。すると鳥が来て食べてしまった。5 また、別の種は土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 また、別の種は茨の間に落ちたが、茨が伸びてふさいでしまった。8 また、別の種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。9 耳のある者は聞きなさい。」

今、湖面においてイエス様は教えておられますが、一般のイスラエル人であれば誰でも見ている、普通の光景をイエス様は語られました。農耕の風景、種蒔きです。種蒔きをするのは、もちろん芽が出て、成長して、実を結ばせるために行います。けれども、全ての蒔かれた種が、その目的の通りに育つわけではありません。種蒔きをすると、僅かに畦道になっている堅くなっています。そこに落ちたら、鳥の餌になってしまいます。次の「薄い岩地」というのは、日本においてはなかなか想像できない風景です。イスラエルの地は、岩と石に満ちています。地中海性の乾燥気候、そして、南部は岩のごつごつした沙漠になっていっています。ですから、岩地に土が薄っすらとかかっているような土地は数多くあります。そして、そこに草や花が生えるのですが、薄いところは早く生えるのですが、すぐに枯れてしまいます。ネゲブ沙漠の入口、ベエル・シェバ辺りは雨季に行くと、緑の牧場のように緑でいっぱいになりますが、少し日が照ると枯れてしまいます。そして茨については、ここに書いてある通りです。ここでの問題は土地そのものではなく、そこは良い土地なのですが、茨も生えているので生えるけれども、実を結ばせられないということです。そして良い土地ですが、大事なものは、種が一つ落ちれば、そうです、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせることができるということです。

そして大事なイエス様の言葉があります、「耳のある者は聞きなさい。」です。これを繰り返して、何度も語られます。

## 2C 悟らない心 10-17

10 すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに「なぜ、彼らにたとえでお話しになるのですか」と言った。

すぐに、弟子たちはイエス様の教え方が変わったことに気づきました。はっきりと語られずに、敢えて譬えで語られていることに気づきました。

11 イエスは答えられた。「あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されていますが、あの人たちには許されていません。12 持っている人は与えられてもっと豊かになり、持っていない人は持っているものまで取り上げられるのです。

イエス様が、「天の御国の奥義」と言われました。これまでは、天の御国を宣べ伝えられていましたが、ここから「奥義」と言われています。奥義の元々の意味は、「かつては隠されていたが、今は明らかにされたもの」であります。ですから、奥にしまっていて謎めいているというような、奥義という言葉にある意味合いとは違います。そうではなく、むしろ、聞く耳のある者たちには、どんどん明らかにされていくもので、他の人たちは閉ざされたまま、悟ることのないままかもしれないけれども、弟子たちには、これまで知らなかったことも知ることができるようになるという意味合いがあります。そこで、持っている人はますます永遠の命の豊かさが与えられますが、命を持っていない人は、今ある命もいつか滅ぼされてしまうということを言われています。

13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、悟ることもしないからです。14 こうしてイザヤの告げた預言が、彼らにおいて実現したのです。『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟ることはない。見るには見るが、決して知ることはない。15 この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。彼らがその目で見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返ることもないように。そして、わたしが癒やすこともないように。』

聖書には、人の心の不思議について数多く語っています。それが心を頑なにすることです。見ているけれども見えない、聞いているのに聞こえない、悟れないのです。これは前回話しましたが、信じない、はっきり聖霊によって教えられているのに拒んでいると、だんだん、霊的なことが聞こえる能力が失われてしまいます。主ご自身が、人の自由意志については、ご自分のかたちに造られているので、そこをどうすることもできません。けれども、その頑なささえも神はご自分の目的のために用いられて、それで裁きの一環として頑ななままにしておかれるのです。

それが理由の一つで、譬えを使われています。譬えはもちろん、わざと人から隠すために使わ

れるのではありません。むしろ、関心のない人、理解の鈍い人でも、興味を持つことができるように例示によって示すために用いられます。けれども、それ上、その意味を知りたいという強い関心と飢え渴きがなければ、それ以上は知ることが出来ません。「ああ、良いお話しでしたね。」で終わってしまうのです。

16 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。17 まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。

たぶんここで、イエス様だけが興奮しておられて、弟子たちは、あっけらかんとしていたでしょう。イエス様は、今、この時に幸いを語っておられます。バプテスマのヨハネのことを話しておられた時もそうですが、彼はこれまでの預言者の中でもっとも偉大であると言われましたが、彼よりも、天の御国で最も小さい者も、彼よりは偉大だと言われました。そうなのです、なぜなら預言者たちが預言していたこと、そのキリストご自身が今、その場におられるからです。イエス・キリストにあって、預言者たちや義人たちが語っていたことがそのまま明らかにされているからです。

この感動を、使徒ペテロも第一の手紙で話しています。「1:10-12 この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」預言者ダニエルでさえも、自分が受けた啓示を悟りたいと思っていたのに、それは封じられていると言われました(12章)。けれども、使徒ヨハネには啓示されて、それがイエス・キリストの啓示、黙示録です。それは開かれた書物となりました。ですから、私たちは幸いな人たちののです。

### 3C 御言葉への応答 18-23

18 ですから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。19 だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。道端に蒔かれたものとは、このような人のことです。20 また岩地に蒔かれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。21 しかし自分の中に根がなく、しばらく続くだけで、みことばのために困難や迫害が起ると、すぐにつまずいてしまいます。22 茨の中に蒔かれたものとは、みことばを聞くが、この世の思い煩いと富の誘惑がみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。23 良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことです。本当に実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」

天の御国の初めの譬えですが、ここから分かることは、御国といっても清濁が混じっているということです。天の御国と言えば、そこには悪いものは何一つない、正しいこと良いことだけがあると思いがちですが、イエス様は、ユダヤ人の指導者たちがご自身を拒んでしまった後に、人々にはどのようにして神の国が伝えられているのかを教えておられるのです。イスラエル人とか、異邦人とかに関わらず、御国の中心になっている要素は、「御言葉と、その聞く心」ということです。これによって成り立ちます。そして、語られるのは同じ御言葉であっても、それぞれの心の状態によって反応が変わるということです。御言葉が語られたからと言って、全ての人が受け入れるのではないということです。

一つ目の道端であります。心が頑なな人には必ずサタンがすぐに、その御言葉を摘み取ります。これは、明らかでしょう。そして二つ目ですが、表面的に、感情的に受け入れている人たちのことです。私たちは、そういった人々がイエス様を受け入れた、ハレルヤと喜ぶのですが、ここでイエス様が言われたことは厳粛に受け止める必要があります。表面的なので、生活で何か嫌な事が起こると、すぐに放棄してしまうのです。そして三つ目が、とても残念であります。現実には起こりません。御言葉は受け入れるのです。ところが、御言葉を受け入れると、生活の中で自分が大事にしているものを捨てなければいけない、自分を変えなければいけないという部分が増えてきます。つまり、心に茨が、雑草があるような状態です。そして、そうした思い煩い、自分の安定した生活というものを崩したくないので、御言葉を受け入れて信じて行くということを放棄してしまいます。あるいは放棄していないように見せかけて、表向きはクリスチャンを見せるのですが、実質的にそれが生活に影響を与えていないという状況です。

けれども、受け入れる人には豊かに加えて与えられます。僅かな一粒の種であっても、何十倍の実を結ばせることができるということです。ですから、初めに信仰を持った時がとても大事であることが良く分かります。心でどんなに小さな変化でも、御言葉をしっかりと受け入れているかどうかで、その後の人生が全く変わります。そして、いつも励ましたいのは、今、自分が何をしているかどうか？はあまり関係ないということです。それよりも、どれだけ深く御言葉を受け入れ、それが浸透しているか？ということです。それによって、初めて聖霊が実を結ばせてくださるのです。聖霊が実を結ばせてくださるので、私たちは聖霊に導かれることを考えるべきであり、自分で実を結ばせることではないのです。チャック・スミスは、「工場ではなく、園なのだ」と言いました。

## 2B 毒麦 24-43

### 1C 収穫まで待つ主人 24-30

24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は次のようにたとえられます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。25 ところが人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて立ち去った。26 麦が芽を出し実ったとき、毒麦も現れた。

イエス様は、弟子たちに四つの種類の土の譬えを解き明かされた後に、また別の譬えを語られ

ました。こちらは、厄介なことが起こっています。良い土地に種が落ちれば、三十倍、六十倍、百倍の実が結ばれるのですが、なんとその良い土地に敵が来て、毒麦の種も蒔いていったということです。

27 それで、しもべたちが主人のところに来て言った。『ご主人様、畑には良い麦を蒔かれたのではなかったでしょうか。どうして毒麦が生えたのでしょうか。』28 主人は言った。『敵がしたことだ。』すると、しもべたちは言った。『それでは、私たちが行って毒麦を抜き集めましょうか。』29 しかし、主人は言った。『いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。30 だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。』

ここでの主人の判断の特徴は二つあります。一つは、毒麦をすぐに刈り取ってしまうと、良い麦も一緒に摘み取ってしまうかもしれないということです。もう一つは、はっきりと毒麦であると判別した時に、必ずそれを集めて束にして焼いてしまおうということです。そしてもちろん、収穫時に良い麦は同じように集められますが、それは倉に納められます。そして、この譬えについての解き明かしはあとで行われます。その前に、もう二つの似たような譬えを語られます。

#### 2C 肥大化する御国 31-35

31 イエスはまた、別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国はからし種に似ています。人はそれを取って畑に蒔きます。32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなって木となり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになります。」33 イエスはまた、別のたとえを彼らに話された。「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。」

この二つの譬えについて、大きく二つの解釈があります。一つは、福音の種が蒔かれて教会が世界中に広がり、世界は豊かにされるというものです。もう一つは、この種とは必ずしも良い種だけとは限らず、悪い種もあり、そのために急速に膨張して世界に影響をもたらすというものです。私は後者の解釈が正しいと思います。

まず、からし種の譬えですが、調べると「クロガラシ」という植物があります。種は 0.5 ミリぐらいと言われているそうです。聖地では、からし種としてお土産用に売られているのですが、私の参加した旅行の団長は、それをさらに潰して、粉のように出てきたのが、それがからし種なのだと言っていました。そのように小さな種なのですが、大きくなると 2.5 尺の高さにさえなると言われています。

そこで、これは何を意味しているかということですが、確かに種が蒔かれて何十倍の実を結ぶという譬えがありました。けれども、二つ目の譬えでは毒麦も混ざっています。ここでの、「木となり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになります。」というのは、旧約聖書の中に出てくる表現で

す。まず、エゼキエルの預言で、アッシリア帝国のことを表現する時に使われました(31:6)。そして、バビロン帝国の王ネブカデネザルがその国が大きくなり、強くなり、繁栄する時に使われました(4:10-12)。そして鳥が巣を作るほどだという表現ですが、イエス様は第一の土、畦道の種について鳥をサタンとして使っておられました。非常に繁栄し、大きくなり、けれどもそれはこの世の姿そのものであったということです。

つまり、ここで言っている天の御国は、「世の制度に取り組みられた宗教」というように言い換えることができます。確かにそこには、良い種が蒔かれて良い麦として成長する姿もあるでしょう。けれども、悪い種が蒔かれてそれが成長するという姿もあり、その悪い種のほうが世と妥協しているので、非常に目立ちます。そして黙示録には、バビロンという存在で偽宗教がまことの聖徒たちの血を流し、富に溺れ、王たちを相手に売春をしている姿があります。これを言い換えれば、「キリスト教会」ならず、「キリスト教の世界」と言ってよいでしょう。キリスト教会が、この世にある政治や経済に取り込まれている状態です。

一昨日でしょうか、クリスチャンでない日本の人が、街角のインタビューで若い日本の人たちに宗教を持っているかどうかの質問をしていました。ほぼ全てが全く関心がない、との反応です。そしてそうした無関心というのが前提ですが、「神の名によって戦争をするのは、良くないことだと思う」という意見が複数ありました。その多くがイスラム過激派のしていることを指していると思いますが、キリスト教の国と言われているところが戦争をしているということも、もしかしたら含まれていたかもしれません。それは全くの誤解なのですが、しかし、キリスト教国と言われているところが、戦争行為をしていることは確かです。戦争の是非を今、話しているのではなく、キリスト教がそのような世俗の国家がしていることと一つにされてしまい、それで宗教に対する漠然として拒否感があります。本当は、キリスト教会の中で無数の良いことがあるのですが、そうした一つのことがあると評判が台無しになります。こういったことが、ここでイエス様が言われていることでしょう。空の鳥が巣を作るほど、キリスト教が大きくなるということは、逆に言うと世に妥協しているということです。私たちは、世の光、地の塩であり、世ではなく、地上に属する者ではありません。

そしてもう一つ、パン種の譬えですが、パン種はいつも聖書では、悪い意味に使われています。種無しのパンの祝いをイスラエルが祝い、イエス様が弟子たちにパリサイ派の教えを「パン種に気を付けなさい」と言われて、注意されました。そしてパウロが、パン種を悪意や邪悪なこととして使っています。その種を入れると全体の粉にふくらみますから、それが罪の性質、悪の性質なので、取り除かないといけないのです。ですから、こども良い意味で使われているのではないことは明らかです。新約聖書の他の箇所では、イエス様も使徒たちも、偽の教えについては絶えず警戒しておられる姿を見ることができます。むしろ、偽の教えのほうが広い門であり、多くの人々がその中に入っていきます。使徒たちの教えとして私たちは新約聖書を手にはしていますが、その中にも、異端の教えや偽りの教えを持っている偽教師との確執が数多く書かれています。具体的には、ユダヤ主義があり、またグノーシス主義がありますが、おそらく私たちが当時生きていたとしたら、その

異端のほうが大きく広がっていて、使徒たちは異端の教えという嵐の中で、健全な教えを伝えるためにもものすごい戦いと苦勞をしていたのではないか？と思われる。

34 イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話された。たとえを使わずには何も話されなかった。35 それは、預言者を通して語られたことが、成就するためであった。「私は口を開いて、たとえ話を、世界の基が据えられたときから隠されていることを語ろう。」

これは、詩篇 78 篇 2 節からの引用です。そこでは、イスラエルの民が神に逆らっている歴史が書かれています。それを譬え話で、隠されていること、と言っていますが、それは「神に選ばれた者たちが、神に逆らう」という皮肉、矛盾というのを伝えようとしているのだと思われます。ですからここでは、イスラエルの民の中で真理が受け入れられていないから、あえて譬え話を使われているイエス様の姿において成就しているということであるのでしょう。

### 3C 譬えの解き明かし 36-43

36 それから、イエスは群衆を解散させて家に入られた。すると弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。37 イエスは答えられた。「良い種を蒔く人は人の子です。38 畑は世界で、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らです。39 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫は世の終わり、刈る者は御使いたちです。40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのようになります。41 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、42 火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。43 そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。

イエス様が、群衆は解散させて弟子たちだけに話しておられます。そして弟子たちが、はっきりとイエス様の解き明かしを聞きました。今まではなしましたように、良い種とはイエス様のこと、そしてその御言葉のことです。その御言葉でさえ、良い土地に落ちた人でなければ実を結ばせることはできません。しかし、その良い土地に落ちた種でさえ、その畑にサタンは何かしてその働きを留めるべく、偽物を蒔くのです。

そして、ここで大事なものは、先ほどの「収穫の時まで待ちなさい」という主人の言葉です。主は、意図的に裁きを忍耐して待っておられます。これが、私たちに忍耐と信仰が試されることです。裁いてほしいと願っても、それははっきりする時まで待ちなさいというのが神のお考えです。パウロは、早まった裁きをしてはいけないことについて、こう言いました。「2コリ 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」そして、テモテの第一の手紙でもこう言っています。「5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。同じように、良い

行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままではいることはありません。」

そして、収穫の 때가 裁きの時ですが、毒麦が集められて裁かれることについて、御使いが刈り取ることに ついては、黙示録 14 章にキリストの再臨のことが預言されている所に出できます。「17 それから、もう一人の御使いが天の神殿から出て来たが、彼もまた、鋭い鎌を持っていた。18 すると、火をつかさどる権威を持つ別の御使いが祭壇から出て来て、鋭い鎌を持つ御使いに大声で呼びかけた。「あなたの鋭い鎌を送って、地のぶどうの房を刈り集めよ。ぶどうはすでに熟している。」」ここの「すでに熟している」という言葉は、あまりにも熟していて、はち切れそうになっているというような意味合いがあります。そこまで神は待っておられるということです。それは、独りでも救われたいという思いもあります。また、早まった裁きを行なわれずに、はっきりした時に裁かれるという意味合いもあります。

そして正しい者たちが太陽のように輝くとありますが、それはダニエル書 12 章で、多くの者を義とした者たちが星のように輝くという言葉につながっているでしょう。私たちの忍耐は、このように必ず神から報いが来るのだという希望に支えられることになるのです。

### 3B 買い集め 44-50

44 天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買います。45 天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。46 高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。47 また、天の御国は、海に投げ入れてあらゆる種類の魚を集める網のようなものです。48 網がいっぱいになると、人々はそれを岸に引き上げ、座って、良いものは入れ物に入れ、悪いものは外に投げ捨てます。49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者たちの中から悪い者どもをより分け、50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

ここの三つの譬えについても、先のからし種とパン種の譬えと同じように、解釈が分かれるところ です。まず、この譬えそのものの中身について話します。一つ目は、午前礼拝でお話ししましたね。畑の中に宝を隠すということは、当時、しばしば行われていました。イエス様も地上に宝を蓄えると、錆になると言われましたが、土の中に隠すからです。タラントの譬えでも、一タラントの者が土の中に隠していました。次に真珠ですが、当時の真珠は私たちの考える以上にもっと高価だったと言 われています。そして新しいエルサレムで、イスラエル十二部族の名が記されている門は、一つの 真珠で出来ていたとあります。それだけ高価なものなので、全財産を使ってでも買い取ろうとして います。そして漁で、良い物と悪い物を選び分けるのですが、これは食物規定とも関係があると聞 いたことがあります。水の中の生き物で、うろこやひれがないものは汚れているとされています。 それを選び分けていたとも言われます。

それで解釈ですが、ここは買っている人はイエス様ご自身、買われている宝や真珠は、神の民であります。けれども、ここを別々の譬えとして読んでしまっているから、他の解釈が出てきます。けれども、イエス様が一連の話の流れとして語っておられることに注目してください。イエス様は、良い麦を集めて倉に入れます。そして、悪い麦を束にして火で焼きます。このことを行なわれるのですから、初めの二つの譬え、隠れた宝と真珠は、良い麦、すなわち御国の子らのことです。そして、三つ目の譬えの魚の選り分けは、良い麦と毒麦を分ける作業と同じことを指しています。

この三つの譬えは、云わば「神のご計画の全貌」と言ってよいでしょう。午前礼拝でお話したように、神がご自分の愛する者たちを贖われるために、御子が血を流すことによってそれを対価として買い戻されるのですが、そのために世界全体を買い戻されます。元々、アダムにこの被造物を支配するように任せておられたのですから、それをキリストにある者たちが任せられるように、世界を贖われるのです。その時に、悪い者は選り分けて捨てるのです。その同じ話が、終わりの時の話として、羊と山羊を選り分ける話と同じことを話しています。神がこの時に、正しい裁きを行なってくださいということなのです。

ですからイエス様の話の流れは、初めに四つの種類の土の譬えで、ユダヤ人指導者が天の御国を拒んでしまった後に、どう展開するかを教えてくださいました。御言葉を聞いて、それを受け入れている者の中で広がっていきます。そして毒麦の譬えで、その世界に偽物が混ぜ込まれるという、サタンの策略があることを知りました。そして神はそのことを終わりの日に裁かれます。そして三つ目の、初めの二つの譬えにおいて神が、大切なもの、愛されている選ばれた者をご自分で対価を支払って、それで贖われることを見ました。これが、神の国のご計画の全体です。

#### 4B 財産の管理 51-52

51 あなたがたは、これらのことがみな分かりましたか。」彼らは「はい」と言った。52 そこでイエスは言われた。「こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」

次に、ここでイエス様は、使徒たちに大事な管理者としての話をされました。天の御国の全貌について話されたわけですが、それを倉から取り出して整理する者のようなものだということなのです。ここには、絶妙な管理能力が必要になります。天の御国の弟子になったものは、学者になるというのは、神のご計画の奥義をしっかりと教えることができるようにするというのです。使徒たちが、その説教の中で、また手紙の中でそのことを行なっている様子を見ることができます。パウロは、「人は私たちがキリストのしもべ、神の奥義の管理者だと考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。(1コリ 4:1-2)」と言いました。そしてパウロは、エペソから来た長老たちに、「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。(使徒 20:27)」と話しました。

## 2A 故郷での拒絶 53-58

53 イエスはこれらのたとえを話し終えると、そこを立ち去り、54a ご自分の郷里に行って、会堂で人々を教え始められた。

イエス様は、初めに話しましたように、母や弟たちが来ても、ご自分のことばを聞いている者たち、弟子たちこそが母であり、兄弟であり、姉妹であると言われていました。しかし、それで肉の家族のことを忘れておられたのではありません。気になっておられたことでしょうか。それで、ご自分の郷里である、ナザレに向われたのかもしれませんが。会堂でいつものように、教えておられました。

54b すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろうか。55 この人は大工の息子ではないか。母はマリアといい、弟たちはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 妹たちもみな私たちと一緒にいるではないか。それなら、この人はこれらのものをみな、どこから得たのだろうか。」

彼らは、驚いています。福音書には、驚いたという言葉がたくさん出てきます。これまでになかったこと、見たことも、聞いたことも無かったことです。主は、驚くべきことを行われます。しかし、その驚きは、彼らの人間的な見方でしぼんでしまいました。一つは、「大工の息子」ということです。ナザレの町は、当時、ガリラヤでは比較的大きかったセフォリス(ツィッポリ)の傍でした。イエス様の時代には、火災があった後で、おそらく建築ラッシュであったと考えられます。大工というと木を取り扱う印象が私たちにはありますが、当時は、いや今もイスラエルの家は石で出来ているので、石工のようなイメージのほうが大きいかもしれません。大工の息子が、なぜこんな知恵を持っているのか？奇跡を行なうことができるのか？と見ています。

それから、彼らはイエス様の家族をみな知っていました。初めに、マリアを上げています。この時点でヨセフが死んでしまった可能性があります。マリアがいて、そして弟の三人の名前を出しています。ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダです。これら四人は、もちろん先の十二弟子にいる同名の人物とは違います。けれども、イエス様が甦られた後に、このうち二人は教会の指導者になっています。ヤコブ、そしてユダです。使徒 15 章に出て来る、教会の指導者のヤコブ、そしてヤコブの手紙がありますね。ユダは、ユダの手紙を書き、ヤコブの兄弟だと自分のことを書いています。彼らは、イエス様と生活を共にしていた時は、信じていませんでした。ヨハネ 7 章に、信じていなかったことが書かれています。けれども、イエス様が復活されてから、初めてはっきりと信仰を持ちました。それまでは、血縁関係が、イエス様を公平に見つめることができなくさせていたのでしょうか。

それはナザレの人たちも同じです。ナザレの村は本当に小さく、数百人しかいなかったのではないかとされています。ですから、みな皆を知っていました。そしてしかも、ダビデからの末裔ということでその親戚縁者がそこにいたということも考えられます。ヨセフはソロモンからの直系で、マリアはダビデの息子ナタンからの直系です。ちょうど、徳川幕府の末裔、徳川家が今、どこに住

んでいるのか？もし、どこかに集落のようにして暮らしていたとしたら、そんな感じでしょう。家系への誇りはあっても、その実質、霊的なことを受け継いでいるかといえば違います。

57 こうして彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」58 そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇跡をなさらなかった。

とても残念なことが起こりました。預言者が敬われないのは、自分の郷里、家族の間でだけだと言われています。それは、預言者というのは神に立てられ、神の言葉を語っているのですから、神ご自身をその人の働きを通して見る必要があるのに、それを見ずに人となりだけを見ているからです。たとえば名医がいたとして、その執刀の技能を見るのではなく、その人の生活を見て、「あなたは、なんでそんなことをしているのですか？」と言って、つまずいているようなものです。そのように、神ではなく、人を見る時に、それは不信仰の現れなのです。神の御子であり、罪を犯されなかったイエス様でさえが、神ではなく、上辺だけのことを見られていたということです。そうであれば、私たち人間が神に用いられる時は、いわんや！であります。

ここでの警告は、その不信仰のゆえに、多くの奇跡をなされなかったという部分です。私たちが、聖霊の働きを見えなくさせる大きな原因がここににあります。神を仰ぎ見るのではなく、人を見ることです。その時に、自分自身が神を信じていないので、それで奇跡が起こらないのです。神は奇跡を行なわれたいと願われています。しかしそこに必要なのは、信仰です。神を信じることです。

次回からイエス様は、弟子たちとさらに時間を過ごすことになられます。宣教も続けて行われますが、宗教指導者らからの危険、政治指導者からの危険もあります、また群衆はご自分を間違った動機で王に仕立て上げようとしていました。そこでイエス様は、もっと大事なことを話すために弟子と話されます。こういった時節が必要でしょう。全てに時があります。